

日英語の色名に見られる多様な文化的相違 —鉛白・墨色・濡羽色などの無彩色系を中心に—

The Diversity of Cultural Differences between English and Japanese Color Terms: With a Focus on Color Words in Achromatic Regions such as *White Lead*, *Snow White*, *Ivory Black*, and *Raven*

吉村 耕治 Koji Yoshimura 関西外国語大学短大部教授 Kansai Gaidai College
山田 有子 Yuko Yamada 色彩講師・イラストレーター Color Instructor, Illustrator

キーワード：日英語の文化的相違、鉛白、純白、濡羽色（鳥羽色・濡鳥）、墨色、漆黒、純黒

Keywords: cultural differences between English and Japanese, white lead, pure white, raven, carbon [lamp] black, piano black, pure black

1. はじめに一色名の普遍性・特殊性と相対性

色名には、ほとんど全ての言語に共通した普遍的特性があると同時に、それぞれの国や地域の風土・歴史・伝統・文化や、時代、ジャンルなどが反映して微妙な差異、つまり、特殊性も見られる。色名は相対的に決められているため、色名が表す色の差も、相対的な差異に過ぎない。また、*black* と *off-black* の区別など、色と色の境目も相対的なものである。色名の持つ相対性という特徴は、人間の色の識別能力や、環境の照度、言語の恣意性を反映している。

和名色名と英語色名を比較すると、和名色名の由来に関しては、特に染料名、染色法、植物名の多さに和名色名の特徴がある。その他にも日英語の色名には共通性ととも、多様な文化的相違が見られる。

2. 黒色に関する日英語の文化的相違と共通性

黒色の原料はどの地域でも、一般的に煤（すす：炭素粉）が使用されていることが多い。日本語や中国語の「墨色」に相当する英語には、*anthracite*、*bone black*、*carbon black*、*coal black*、*graphite*、*ivory black*、*lamp black*、*pitch black*、*tar black* などがある。中国語には百草霜 [bǎicǎo shuāng: パイツァオシュワン] もある。人類最古の約3万2千年前の絵画、フランス南部のショーヴェ洞窟壁画（動物画）には、吹き墨（oral spray painting）の技法が使用されている。色彩は人類の歴史の始まりから利用されている。最初の色彩は人類の特徴である「火（fire）の使用」（100万年以上前）に関連している。

墨色を表す英語色名の語源を考えると、ギリシャ語に由来する語には、「松明（たいまつ）」の意の *lamp* や、「黒鉛（こくえん）、石墨（せきぼく）」の意で炭素から成る鉱物 *graphite* がある。ラテン語由来の語には、原義が「石炭、木炭」という植物化石で、「炭素」の意の煤 *carbon* や、象牙を燃焼させて作る黒色

顔料で「象牙」の意の *ivory*、無煙炭（炭化が最も進んだ天然石炭で火力が強い）の黒色（濃い灰色）を表す *anthracite*、原油や石油タール・木タールを蒸留した後に残る黒色のかすで「松脂、樹脂」の意の *pitch* がある。古英語からの色名には、原義が「脂のある[燃えやすい]木」で、石炭や木材を乾留（空気を断って加熱し分解する操作）して得られる黒い油状の液の *tar* や、骨を焼いて黒くした骨炭である *bone*、「石炭、木炭、燃えさし」の意の *coal* がある。松明の煤を利用した *lamp black*、植物化石の石炭や木材を乾留して得られる *tar black* 以外に、象牙や骨を黒焼きにした *ivory black* がある。そこに英語色名の特徴がある。

中国では殷の時代（BC17世紀頃-BC1046年）の甲骨文に、墨書や朱墨の跡が発見されている。最初は松脂を燃焼して作られた松煙墨から始まり、魏の時代（220-265年）には、柴や雑草を釜戸で燃やした灰も使用され、南宋時代（1127-1279年）には油煙墨が普及している。日本では最初は中国からの輸入品に頼っていたが、奈良時代（710-794年）後期に、松煙墨が和東（わかとう: 奈良県和東町）で製造され、平安時代（794-1185年/1192年頃）末頃に、荏胡麻（えごま）の油を使って油煙墨が造られている。

色名の「純白」に対して「純黒」が使われており、国内最高の黒が深い光沢を持つ「漆黒」である。「濡色」は濡れた艶のある色で、「濡羽色」「濡鳥」「鳥羽色」は紫みのある光沢を持った黒である。日本の鳥は主に中型の鳥で、英語では *crow* とか *rook* と言い、不吉の鳥とされている。渡り鳥であるオオガラスは *raven* で、英語色名には *raven* が採用されている。日本語の慣用表現では、女性の濡れたような艶のある美しい黒髪は「（鳥の）濡羽色」と表現されるが、英語では *raven hair* と言われる。英語色名の *raven* には、濡れたような艶のある美しさは表現されていない。「濡羽色」「濡色」には濡れたような艶のある髪に美意識を感じる日本人の感性が表現されている。

和名色名には染料や染色法に由来するものが多い。泥土による染色法に由来する「涅色」（くろいろ: 褐色みを帯びた黒色）や「黒椽（くろつるばみ: 椽はクヌギの実である団栗の古名）」「墨染、黒染（くろぞめ）」などがある。「涅」は平安時代（794-1185年/1192年頃）の漢和

字書『新撰字鏡(しんせんじきょう)』に、「椽」は平安中期の漢和字書『和名類聚抄(わみょうるいじゅしょう)』に収録されている。色名の豊かさや微妙さとともに、色名の歴史の深さにも、和名色名の特徴がある。「黒椽」は平安中期に官人が朝廷に出仕する時に着用した衣服(朝服、その一種の袍[ほう:男性が束帯や衣冠の時に着る上衣])の色である。「墨色」は忌中の服色や鎌倉時代の遁世僧(とんせいそう)の僧衣の色である。

英語色名には、僧服の黒衣の色から付けられた *domino* がある。*domino* は、ラテン語の *dominus* に由来し、古代の共和制ローマ下では主権の称号として、封建領主へのラテン語の称号として、中世では教会・学術の称号として用いられていた。

3. 白色に関する日英語の文化的相違と共通性

鉛白を意味する英語の色名の *white lead* (初出例 1385 年) の *lead* は鉛を意味する。鉛白は、塩基性炭酸鉛の白色顔料で、古代ギリシアの植物学の祖テオプラストス(Theophrastus: BC371 年-BC287 年)によって発明されたと言われ、化粧用として使われ始めた。鉛白・白粉(おしろい)の原料、白鉛鉱(学名 *cerussite*) は、ラテン語の *cērusa* に由来する。鉛白の製法は古代ローマのプリニウス(Plinius: 22 or 23-79 年)の時代に確立されていた。その製法がシルクロードで中国に伝わり、明の時代(1368-1644 年) 1637 年刊行の産業技術書『天工開物(てんこうかいぶつ)』に収録されている。鉛白は、中国の西方を指す胡(こ)から伝えられたため、唐の時代では鉛白を胡粉(*hú fēn*: フーフェン)、日本の奈良時代(710 年-794 年)では鉛白(塩基性炭酸鉛)とその類似物の塩化物系鉛化合物を胡粉(ごふん)と呼んでいた。6 世紀後半の装飾古墳の時代まで、白土(陶土、蠟石(ろうせき)、酸性白土)が使用されていた。飛鳥時代には遣隋使と遣唐使の派遣が始まっており、日本での鉛粉製造の最初の記録が『日本書紀』「持統天皇六年閏五月」に、飛鳥時代(592-710 年)の 692 年 5 月 4 日に僧観成の造った(白粉としての)鉛粉を褒賞されたとある。この鉛粉は鉛白ではなく、鉛白の類似物の塩化物系鉛化合物と推察される。奈良時代には、鉛白は唐からの輸入品に頼っていた(cf. 成瀬: 15)。唐から日本に渡ってきた唐胡粉(塩基性炭酸鉛)をまねた倭胡粉(塩化物系鉛化合物)が国内で造られていた。胡粉は、中国渡来であることを表すため、唐土(もろこし)とも言われた。室町時代(1336-1573 年; 1493-1590 年は戦国時代)には、伊勢産出の水銀を原料とする白粉が生産された。白粉は化粧品や、皮膚炎を治す外用薬などとして貴族たちに珍重されて

いた。江戸時代(1603-1868 年)には、米や粟の澱粉白粉も使われたが、伸びや付きのよい比較的安価な鉛白粉(なまりおしろい)が広く庶民に普及した。深刻な鉛中毒のため、昭和 9 (1934) 年に鉛白粉の製造が禁止された。18 世紀以降、安全性の高い白色顔料の酸化亜鉛が登場する。亜鉛の蒸気を酸素と反応させることにより、亜鉛華と呼ばれる白色粉末が得られる。色名には亜鉛白、立德粉(リートーフェン)、*zinc white*、*chinese white* などがある。医薬品や化粧品にも用いられ、第 1 次世界大戦(1914-1918 年)後、白色顔料の酸化チタンが生産され、塗料や、絵の具、釉薬、食品、医薬品、化粧品などに利用されている。チタン白、*titanium white*、*snow white* がある。

最上の白さを表す色名には、純白、*pure whiteness*、*virgin whiteness*、雪白(せつぱく)、雪色、*snow white* がある。*snow white* の初出例は 1000 年前から。雪の白さは最上の美称として使われている。空木の花で雪のように白い花を咲かせる「卯の花色」がある。

色名の *polar bear* (初出例 1917 年) は、北極の白熊の毛皮の色で、ラテン語の *polāris* に由来する。英語の *lily white* の *lily* も、ラテン語の *lilium* に由来する。日本ではユリは清楚な花とされ、美しい女性が歩く姿に形容されているように、日本の白百合色は清らかな白を表す。*oyster white* (初出例 1893) の *oyster* は、ギリシャ語の「骨」の意の *ostreon* に由来しており、骨のように堅い殻を表し、生牡蠣の身の色が、白に近い黄みの灰色と灰色であるため、牡蠣の殻の内側の色を表す色名と推定できる。

月白(つきしろ)は、月が出る頃に空が明るく見えることで、色名の月白(げつぱく)は、わずかに青みを帯びた美しい水色に見える白である。1000 年頃、中国の景德鎮で微量の鉄分を含む釉薬で焼かれた青白磁(せいはいくじ)が製造され、東アフリカに輸出された。東洋の白磁は、17 世紀頃の西洋社会の憧れであり、1709 年にドイツのザクセン州で、白磁が製造されている。*moon white* は、建築材料の *granite* (花崗岩、御影石) を加工した商品名である。

4. おわりに一色名に見られる古今東西共通の概念

化粧用としての鉛白の製法は、古代西欧からシルクロードを通じて中国に、そして、遣隋使や遣唐使の派遣により日本に渡来している。*alabaster* は、現代では(雪花)石膏を指し、古代では方解石を意味している。古代エジプトでは装飾用彫刻材や容器の材料として用いられていた。*alabaster skin* (白く滑らかな肌)は美しい白さを表している。美白への憧れは、古今東西の共通の概念で、普遍的である。